

特集

熊本大学大学院生命科学研究部 免疫学分野教授就任のご挨拶 ーウイルス感染と免疫応答ー



大学院生命科学研究部
免疫学分野教授
押海 裕之

平成二十七年十一月一日付で熊本大学大学院生命科学研究部免疫学分野教授に就任いたしました。私は大阪大学理学部生物学科を卒業し、大阪大学大学院で学位を取得した後、大阪府立成人病センター研究所や北海道大学大学院医学研究科免疫学分野などでウイルス感染時の自然免疫応答の研究を行ってきました。

ジカ熱や新型インフルエンザなどの新興感染症は、個人の健康と生命を脅かすのみならず、社会の混乱と停滞を招く深刻な問題です。自然免疫応答は、感染初期の生体防御に必須の役割を果たすのみならず、樹状細胞を介したナイーブT細胞のプライミングにより獲得免疫系を活性化し、抗体産生や感染細胞に対する細

胞傷害活性を惹起します。一方で、多くのウイルスは宿主に感染するために免疫応答を抑制するように進化しています。

例えば、肝がんの約七割の原因として知られているC型肝炎ウイルスは、肝臓に数十年に亘り持続感染しますが、このウイルスのNS5Aプロテアーゼが、我々が発見したRipletユビキチンリガーゼを切断することでI型インターフェロン産生を抑制することなどが明らかとなつてきています。

ワクチンは、ウイルス感染症の予防ときました。しかし、ワクチン投与後の副反応の課題が残されています。季節性インフルエンザは毎年数千人の死亡の原因となることが指摘されていますが、その予防のためのインフルエンザHAワクチンは、ワクチン投与後の副反応が生じないことを主眼に開発されたため、臨床では十分な免疫価を誘導できないことが問題点として指摘されることも多々あります。こうした副反応の発症メカニズムとして免疫応答が重要であると考えられています。そのメカニズムは十分には解明されていません。今後の免疫学の基

礎研究の課題の一つとして、ワクチン投与後の副反応発症機構の解明が重要になると思われます。

熊本大学の免疫学分野は、免疫医学研究施設免疫生化学教室を前身とし、平成四年に、免疫医学研究施設の改組により、医学部免疫学講座として始めました。

初代教授として尾上薫教授が就任し、平成七年からは阪口薫雄教授が第二世代教授として就任し、免疫学の研究が行われてきました。自然免疫は、アメリカのエル大学を起点として研究が発展してきましたが、今後は、熊本大学から世界に発信できる免疫学の基礎研究をしていきたいと考えています。今後ともご指導、ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

熊本大学大学院生命科学研究部 分子脳科学分野教授就任のご挨拶



大学院生命科学研究部
分子脳科学分野教授
岩本 和也

平成二十八年二月一日付で分子脳科学

分野教授に就任いたしました岩本和也と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は平成八年に東京農工大学農学部を卒業、平成十三年に東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻で博士号を取得、平成二十二年まで理化学研究所脳科学総合研究センターにて研究員、その後東京大学大学院医学系研究科分子精神医学講座特任准教授として、精神神経疾患研究に従事してまいりました。このたび、熊本大学で研究・教育に従事する機会を与えて頂きましたことを心より感謝申し上げます。

統合失調症、気分障害、発達障害などの精神疾患は、思春期前後の人生の早期に発症し、生涯にわたる治療が必要となることも珍しくない重篤な疾患です。驚くべきことに、ほぼ全ての精神疾患は発症原因や分子病態が明らかではありません。このため、疾患の理解に基づいた適切な診断や治療法の開発が困難な状況にあります。一方、疫学研究からは、両親の年齢、妊娠期のウイルス・細菌感染、周産期の状態、乳幼児期の養育環境、都市生活など、人間をとりまく様々な環境